

 座談会

日本脳神経外科同時通訳団

—アジアをリードする日本医学界からの発信—*

出席：植村研一¹⁾、大井静雄²⁾、本郷一博³⁾ 司会：伊達 勲⁴⁾
(五十音順)

No Shinkei Geka 33(5): 505 - 514, 2005

伊達(司会) 本日は、お忙しいなかをありがとうございます。私は現在、日本脳神経外科同時通訳団の団長をさせていただいております。ぜひ一度、この同時通訳団について皆さんに知っていただくとともに、われわれの活動を紹介することが若い人々を刺激して、ここに入って頑張ろうという人が増えればと考えてまして、今回この座談会を企画しました。よろしくお願いたします。

■日本脳神経外科同時通訳団の始まり

伊達 日本脳神経外科同時通訳団は、もともと植村研一先生が学会で個人的、あるいはご依頼を受けて、外国からの講演者に日本人のプレゼンテーションを横に座って通訳されていたことに始まったというふうに理解していますが、植村先生、そのあたりからお話いただけますか。

植村 学会の同時通訳の始まりは、脳外科よりも外科が先なんです。昔、私のいた千葉大に中山恒明先生という有名な外科の先生がおられて、私がアメリカから帰ってきたときに、牧野博安先生から中山先生の外科手術の映画の吹き替えの代役を頼まれて、それ以

来、毎週のように中山先生の国際学会の講演の吹き替えをやりました。

中山先生が日本外科学会コンгрессの会長を京都でなさった際、同時通訳の依頼があったんです。

伊達 そのときは英-日と日-英をされたわけですね。

植村 そうです。それが、私の記憶では昭和45年か46年です。トップバッターがWangensteen OHでした。私は彼の本を読んでいたもので、どんどん通訳することができて、楽しくやりました。ところが、京都市長の挨拶も通訳することになって、明治が出てくる、昭和が出てくる、政治用語も出てきて、それでパニックちゃったんですね。次にアメリカ人の演者が出てきて、ジョークを飛ばすんです(笑)。ジョークというのは翻訳できません。このとき、これはプロに任せるしかないと思って同時通訳は諦めました。

その後、ある学会にシカゴからBucy PCが特別講演で来てたんです。当時は、ゲストスピーカーとして海外から1人か2人呼ぶのが普通で、そのときはBucy 1人でした。牧野先生の指示でBucyの通訳をすることになって、僕はずっと彼の耳元で囁きながら通

* 2005年1月14日、医学書院にて収録

1) Kenichi UEMURA, M.D., 医療法人社団弘慈会 加藤病院院長 (☎ 027-0074 宮古市保久田 8-37)

2) Shizuo OI, M.D., Ph.D., 東京慈恵会医科大学脳神経外科教授 (☎ 105-8461 港区西新橋 3-25-8)

3) Kazuhiro HONGO, M.D., Ph.D., 信州大学医学部脳神経外科教授 (☎ 390-8621 松本市旭 3-1-1)

4) Isao DATE, M.D., 岡山大学医学部脳神経外科教授 (☎ 700-8558 岡山市鹿田町 2-5-1)

訳をしたんです。それで彼が僕のことを覚えて、日本に来るといつでも僕に依頼がくるようになったんです。

伊達 先生の周りに何人かの外国人が座って、先生が囁かれるのを直接聞いていた形ですね。

植村 そうです。外科医はポインターを使って説明しますが、吹き替えがポインターとずれてしまうと話になりませんよね。プロの同時通訳は、医学用語を知らないために変な訳語を使うと同時に、スライドを気にしないことがあります。でも私は、とにかくポインターにあわせて通訳することを心がけて最初からうまくいったので、Bueyは喜んでくれたわけです。やはりこれは医師が通訳するしかないかと、私もその頃から思うようになりました。それで、しばらくはひとり寂しくやってたんです（笑）。

それから、杉田慶一郎先生から同時通訳者を養成したらどうかというお話があったんです。そのときに、小林茂昭先生が信州大学の助教授で、脳神経外科コンgres（以下、コンgres）の会長をするので、その前に勉強会をして弟子を養成することになりました。もともと杉田先生のアイデアだったんです。

■研修会の変遷

伊達 それが、1987年ということですね。小林茂昭



▲伊達 勲氏



▲植村研一氏

先生は、88年のコンgresの会長でした。

植村 勉強会は、泊り込みでやりましたね。

伊達 このときのメンバーというのは？ いま、小林先生のお名前が出ましたけれども。

植村 もちろん、大井先生もいらしたでしょう？

大井 はい、おりました。

伊達 どういう人たちにお声をかけたのか、英語がお得意だとわかっていてお集めになったんですよね。

植村 あれは、杉田先生か小林先生が声をかけたんじゃないですか。

大井 中川 洋先生（愛知医大教授）にお声をかけられたのは、植村先生ですよね。その中川先生と小林先生から、私はお誘いを受けました。

伊達 何人ぐらいでされたんですか。

大井 最初は十数人ですね。第1回の資料は私の手元に全部ありますが、今日はその一部を持ってきました。

伊達 これを見ると二十数名だから、たぶん15人くらいでしょうね。

本郷 小林先生の記録によると、外国留学が5年以上の人たちを集めたということですね。

伊達 この中で第1回から活動されているのは、植村先生と大井先生で、われわれはその後ということですが、本郷先生は帰国されてすぐくらいですね。



▲大井静雄氏

本郷 私は、第1回のときは留学中だったのですが、その次の年の小林先生のコンgresからかかわっていました。

伊達 私は、1992年の福島での研修会から参加させていただいて、そのときに皆さんと、本当の意味で初めてお会いしたわけです。

大井 松本の研修会の責任者として、杉田先生、小林先生と、お2人の名前があります。そして、第2回が阿蘇なんですよ。これは福井仁士先生（佐世保共済病院）、89年が諏訪で、中川 洋先生、佐藤 潔先生（東京都高齢者医療センター）、小林茂昭先生の3人がお世話されて、第4回が千葉大の山浦 晶先生、第5回を、また小林先生が諏訪でなさっています。

本郷 諏訪湖の森というところでしたね。

大井 そして第6回が92年、福島でした。その次から大磯に移って、私が第7回研修会を93年に行いました。私は、1987年の阿蘇のときにお誘いをいただきまして、最初の学会の同時通訳は小林先生のときでしたよね。

本郷 88年でしたね。

大井 ええ。ですから、87年にはまだ発足していなかったのですが、小林先生が国際関係委員会の委員長をされていて、その次が中川先生というふうにバトンタッチされてきて、コンgresとの関係で同時通訳を

始めようということになったわけです。

国際関係委員会の委員長が私にまわってきたとき、大磯では同時通訳研修会に役立つ会を何か持たなければいけないと思い、国際学会のように英語だけで発表する練習の会を立ち上げました。そのときに、湘南のSをつけてSNEF（Shonan Neurosurgical English Forum）という名称でスタートして、それを年に2回やりました。回数が同時通訳研修会にキャッチアップして、いま、ほぼ同じ回数になったので年に1回に戻しました。1998年の第10回までやりました。第11回からは名称をJNEF（Japan Neurosurgical English Forum）に変え、今年で20回を迎えたわけです。

本郷 今年、同時通訳研修会が第19回、JNEFが第20回です。

大井 これが第1回の写真です。東大の高倉公朋教授がゲストスピーカーで、私もこのときは助教授になったばかりで国際関係委員会委員長を仰せつかったものですから、張り切ってこういう会をつくったんです。やはり、これは植村学校に入れていただいた産物です。植村先生にもご講演いただいたことがあります。いまではずいぶん活発な会になっています。

伊達 JNEFで英語発表している先生はわりと若くて、これから通訳などしてみたいという先生が多いように見受けられます。夏季研修会は、だいたい1日半ほど



▲本郷一博氏



▲ブースを設置した実践さながらの研修。

行っていますが、ここまでのところで何かございますか。

本郷 JNEFの前はSNEFですが、その前に、杉田先生、小林先生が中心になって、夏にテニスの好きな脳外科医が50～60人全国から集まる「信州セミナー」という名前の会があったんです。これは、日本語のプレゼンテーションをして、それを日英同時通訳の練習の場にして、それとコンバインしたんですね。

伊達 なるほど、信州セミナーというのを夏にされていたんですね。ただ、それは脳外科の一般的な日本語による発表だったけれども、それを小林先生が kongress の会長になったときに、その場で同時通訳をやるということになったんですね。

本郷 そうです。それで何回か回数を重ねて…

伊達 福島のときも、たしか福島医大と奈良県立医大のジョイントセミナーに入っていたりしましたね。

大井 通訳の練習には竹筒を使って…(笑)。

本郷 そうでした。お互いに、どういう通訳をしているかを聞けるようにしたセットですよ。

伊達 糸電話みたいなものですよ(笑)。竹筒は、1回だけでしたか。

本郷 信州で夏にやったときには、FM ラジオを使ったんですが、混線したりしてなかなか難しかったです。

伊達 この数年は、ブースを会場内に設定したり、もともとブースのある会場を使ってトレーニングをしたりというふうにしています。

本郷 実際の学会に近い環境にして、トレーニングしています。

伊達 今年もブースがありますか？

本郷 会場の中にブースをセットアップして、それで実践のトレーニングができるような形にしようかと思っています。

伊達 ブースの設定で、皆さんにチャンスが平等にわたって、しかもはっきり聞こえる日本語を英語にするという、まさに学会と同じ雰囲気でのトレーニングできるようになったのは、非常にいいことだと思います。脳神経外科学会や kongress から、経済的なサポートをしていただけるようになったので、そういうことも可能になってきて非常にありがたいことだと思います。

植村 FM を使うというのは、Simul から習ったものなんです。国際会議場には必ずブースがありますが、ブースがないときには囁くのは5～6人が限度なのでおやめなさいと、20～30人だったらFMを飛ばせばいいというわけです。

東大の高倉公朋先生が kongress の会長をされたときに、まとめて購入してくれたんだと思います。それで、われわれがセミナーをするたびに東大から借りていた、そういう時期があります。

本郷 毎年いろいろ工夫をしてきましたよね。

伊達 FM ラジオは電波が届かなくなるとどうしても「シャーッ」という雑音が入るんです。実際のブースにはキャンセリングシステムという、音が届かなくなったときに雑音がでないような仕組みがしてあります。だから、いいセットで聞いていると雑音がしません。それと、おそらく電波の周波数が特殊なので混線しないですよ。

大井 FM ラジオで行っているときは、いくつかのグループが使っているときの周波数の切り替えがけっこう大変でした。デジタルじゃないですから。

伊達 そうでした。そういう苦勞を経て、いまは本当の通訳の雰囲気での練習ができるようになっています。現在、同時通訳団にはアクティブに活動されている方が61名いらっしゃいます。ただ、皆さんお忙しいので、一度に来られるのは30名ぐらいでしょうか。それに、年齢が上になられて、リタイアしたいとおっしゃる方も少しは出てきています。

■ 2005年の研修会

伊達 最近は同時通訳団の研修会と JNEF を並行してやっています。新しく参加された先生にはできるだけ JNEF で英語の発表をしていただいて、翌日に日-英のトレーニングをしたりするという形式になってきています。今年は本郷先生がこの会を主催される予定になっていますね。どのようなプログラムをお考えですか。

本郷 そうですね。まだ、具体的には決めては無いのですが、自分自身が、すごく冷や汗をかきながら苦勞した、あの刺激、ドキドキ感ですか。そういう場が必要かなと思っています。

植村 日程は決まってるんですか。

本郷 ええ、7月15、16日です。アナウンスはこれからなのですが、そういう場をぜひつくりたいと思っています。

伊達 ヒヤヒヤ、ドキドキの場ですね。

本郷 ええ、それが毎年コンスタントに必要なと、本当に思うんです。

伊達 わかります。私は、一昨年、岡山で主催しました。そのときに、自分たちの学部の医学英語に興味のある学生や医学英語教育に興味のある教官に声をかけ参加していただきました。ずいぶん勉強になったとおっしゃっていました。

■ 同時通訳の活動の場

伊達 私の記憶では、同時通訳団の活動は、脳神経外科学会総会とコンGRESS以外でされることは少なかったと思いますが、最近はそれ以外の学会からの依頼がずいぶん増えました。昨年1年を振り返りますと、神経内視鏡学会、頭蓋底外科学会、脳卒中の外科学会といった学会からは、公式に団長である私に依頼がございましたし、脳腫瘍の外科学会からも依頼がありました。脳外科には、英語に興味のある先生が多いですね。植村先生も、そう思われますか？

植村 私もそう思いますね。脳外科は特にそういう傾向が強んじゃないでしょうか。

伊達 ほかの科に比べて、そんな印象があります。

植村 以前、慈恵医大小児神経内科の前川喜平先生が小児神経内科学会長の時、私に同時通訳の依頼がありました。会場を分けてセミナーもやるというので、私

はメイン会場を引き受け、セミナーには留学経験のある若い医局員が数人、即席で同時通訳をするようになったんです。練習を2～3時間して、phrase translationの話をしました。その後一斉に始めたんですが、想像したとおり、2～3分やってメンタルブロックになり黙ってしまったということがありました。留学経験のある人なら誰でもできるわけではなくて、同時通訳には特殊なトレーニングが必要なんです。

伊達 まさにおっしゃるとおりで、そこは大切なところで、若い人にぜひ研修会等にチャレンジしてもらえればよくわかっていただけたと思います。

■ プロの通訳との相違点

伊達 ところで先ほど、植村先生が試行錯誤を重ねながら、ポインターを追うことに着目されたとおっしゃいました。現在はそのようなテクニックは常識となっていますけれども、プロの通訳団と違う点は、われわれは医学用語、専門用語に強いという点で、その強みを生かした同時通訳をしている。このあたりを植村先生はご自分でマスターされて、私たちに伝授されてきたということですね。

植村 あともう1つ、われわれとプロとの違いは、われわれは中身を通訳していて、プロの人たちは言葉をすべて訳すんです。彼らの間では、「学問の世界では、自分たちはアマチュアで、介入をしてはいけない」という哲学があって、どんな冗漫な話でも、通訳してしまうんですね。

日野原重明先生が毎年開催されるセミナーに同時通訳として参加しているのですが、日野原先生は、「外国人が10分話したものの訳を、10分話されたら長く



▲ 2003年岡山にて行われた研修会の様子。

同時通訳での失敗談

伊達 植村先生でも、訳が出てこなくて、頭の中が白くなくなってしまったことはあるでしょうか。

植村 メンタル・ブロック。あるある。やっている本人は緊張しているから、ちょっと何かの単語にひっかかったら、その瞬間に頭の中は真っ白になっちゃう。だから、そのときはバトンタッチでいいんですよ。長井鞠子さん（通訳者）がおっしゃっていましたが、プロの世界にだって、メンタル・ブロックはあるそうです。

伊達 例えば、プレゼンテーションの重要なキーワードが繰り返し出てきますが、それがどうしても出てこないということは先生にもありました？

植村 ありますよ。

伊達 あるとお聞きすると、私なんか安心するんですけど、私は、それがいちばん恐いです。「このキーワードの英訳がわからなかったら、どうしよう」と…。

植村 英-日はいいんですよ。そのままでもいいから、日本語のときが困るんです。「この日本語の専門用語を、英語でどう言うんだっただかな」って、それがわからなかったらどうしようもない。

伊達 そういうものに限って、けっこう繰り返し出てきたりするんですよ。

植村 そうそう。それがキーワードだから。

大井 特に、医学の世界はサブスペシャリティの時代で、極めて専門分化しましたよね。ですから、ちょっと専門を離れると、ボキャブラリーからターミノロジーと、非常にレベルが高く、同時通訳は難しい。領域が違ったら、明らかに表現力は落ちてきますね。自分の領域だったら、演者が喋るよりも速く喋れますが…（笑）。

伊達 なるほど。ある意味、先んじられるくらい。

植村 われわれにとって、小児の奇形なんかが出てきたら、もうどうしようもないです。

大井 名前がわかりませんよね。

伊達 逆に自分の専門領域の人の場合、その人が何を言うかフィロソフィーまでわかっていますよね。

本郷 そうですね。内容もわかる。

大井 通訳というのは、話の内容がわかっていないとできないというのが、よくわかりますね。

本郷 本当に、そうですね。

伊達 本郷先生はいかがですか。

本郷 私は、自分自身、リテンションが非常にできないと思っていて、植村先生の phrase translation のお話を聞いて、「ああ、そうやればいいんだ」と思いました。特に最初の頃は、翻訳するタイミングがつかめなくて、ちょっとしたミスどころか、ぜんぜん話にならないという状況で替わってもらったことがありました。

伊達 先生でもそんなことが最初の頃にはあったわけですね。若い人が最初に喋れないのは無理もないですね。

本郷 普段から言葉を出すトレーニングをしておくことだと思います。私のところのカンファレンスでは、できるだけ英語を使って、あるいは日本語のディスカッションでも英語へのトランスレーションをという練習を常にやるようにしているんです。そうするとテクニカルタームが出やすくなる。逆に、そこで引掛かっちゃうと、黙らざるを得なくなるというか、乗り遅れてしまう。それが一番かなと思います。

大井 失敗談ではないんですが、通訳をして初めてわかったことですが、自分の発表している日本語がいかにかひどいものかということなんです（笑）。私は最初、その一番悪い例として、植村先生には通訳の練習台に立たされたんです（笑）。

伊達 同時通訳をするようになって、いいプレゼンテーションというものについても学びますよね。通訳団の人が、一瞥して「全部訳せるな」と思うスライドを作る人はプレゼンテーションがうまい。

大井 そういう観点で発表しますからね。

伊達 「この人のスライドは…」ということになると大変ですよね。色がいっぱいありすぎるとか、どこが強調されているのかわからないとか、そういうことも非常に学びましたね。

てたまらない」とよくおっしゃるんです。私は医学の内容についてはわかりますから、10分喋ったものを3分でまとめることができます。これは、われわれ医師でなければできないことです。

伊達 たしかに、言葉を訳しているという感覚よりも、内容を訳しているという感じが非常にありますね。基本的にわれわれは、スライドの画面を見ながらやりますが、プロの通訳者の方はスライドはどうでもいいわけです。聞こえてくる音を正確に訳されている。そこがぜんぜん違う点ですね。

植村 それから phrase translation というのがあります。同時通訳を始めたばかりのころは、訳が終わらないうちに次の言葉が入ってくるので、頭がサンカクになる(笑)。でも、あるとき、ハッと気づいたんです。相手はネイティブだから、文法よりもタイムリーに訳したほうがいいんじゃないか、と。それでフレーズごとに切って、キーワードだけ訳すというのを思いついたんです。「わたし、あなた、友だち、たくさん」。通じるでしょう？これが、phrase translation です。その悟りを開くまでに3年かかりましたが、このお陰で非常に早くなってポンポン通訳ができるんです。

伊達 私が福島での研修会に初めて参加したときは、phrase translation のことをまったく知らなかったんです。日本語は、最後に否定・肯定がくるので、やはりあれを聞かない限り、どうも訳すつもりになれないんですね。ところが、コツを先生から聞いて「目からウロコ」でした。

本郷 最初はまったくそうですね。

伊達 新しく参入する方は、皆、そうですね。日本語の結論がどうなっているかを、待ってしまうんです。植村先生は、それに自分で気づかれたけれども、わからないといつまでもそれをやってしまうと思います。

■同時通訳団の活動に参加して

伊達 同時通訳団に参加・活動して、本郷先生は、どんなことがよかったですか。

本郷 大きくは2つあって、1つは、決してうまくない英語を自分なりに使って、自分の通訳が実際の学会で生かされたことは、非常にやりがいを感じています。外国人のゲストも、留学生も多勢参加されるように

なっていて、同時通訳者がいることでその人たちがシンポジウムの中でディスカッションができる。そこに自分がかかわって、そのディスカッションがうまくできたときには、やってよかったなあと感じます。

それからもう1つは、英語を中心として、それを核に素晴らしい人たちが集って、非常にモチベーションの高い仲間に出会えることです。大学の枠にまったく関係ない、このつながりが一番大きいかもしれません。輪が広がったこと、これは自分にとって一番の財産かなと思っています。

ですから、ぜひ多くの若い人たちに入ってもらって、その輪をさらに広げてもらいたいと思います。英語や同時通訳を離れたところでも、いろいろなコラボレーションができる、それも非常に大きいです。

伊達 私が本郷先生と深い付き合いをさせていただくようになったのも、この同時通訳団を通じてのことです。

本郷 ええ、福島の研修会を通じてですね。

伊達 お互いに、個人的な相談ごともしやすくなります。脳外科の専門分野での仲間に加えて、この英語を介しての集りは非常に大きい存在ですよ。

それともう1つ、この通訳団の研修会にゲストをお呼びしますが、そのゲストスピーカーから学んだことも多かったような気がします。特に私は、村松増美さん(同時通訳者)ご自身から実際に重要な政治の場で通訳をなさっているというお話を聞いて、よけいにやる気が出ました。大井先生は、何かございますか。

大井 お2人が話されたとおりのことを、私も感じます。それに加えて、ここへは日本の脳神経外科医の中でも英語に自信のあるツワモノがやってくるわけです。同時通訳のトレーニングとか、学会で外国人と対等にやりあってディスカッションするためのトレーニングというのは、おそらく日本で一番活発なんじゃないかと思うんですね。ネイティブに話す国を除いて、こんなことをやっている国はほんとうにないと思います。

日本人は英語に関しては極めて劣るほうの人種だとは思いますが、非常に強い向上心、モチベーションともいうべきものをもっている。いまの世代でいいますと、自分がグローバル精神をもった国際人になろうとする、その強い志向が若い人たちにはあるんですね。

そしてこの会は、そういうことを非常にプロモートするものになっている。

これは医師の集まりですけれども、そういった人たちがいかに国際的に活躍するか、そのセンスと実力をつけるという意味では、非常にいいことだと思います。

それともう1つ、研修会のゲストの方々もっていらっしゃる文化的なものの方の見方、国際的比較等々は、極めて私たちには教育的なものだというふうに思います。

■英語上達のための勉強法

伊達 教育ということでは、先生方は英語に関する本を書かれていますね。植村先生、大井先生はご本をたくさん出されていて、私もいろいろ勉強させていただきました。植村先生は『うまい医学論文の準備と作成』、『うまい英語で医学論文を書くコツ』（医学書院）をご執筆されていますよね。

植村 私が「うまい英語」というのを言い出したのには理由があるんです。私がアメリカから帰国後すぐに、同級生が学会で英語で発表しなきゃいけないとって相談に来たんです。そこで原稿の添削をしたんですが、彼は学会の前にスタンフォードへ寄って、自分の留学時代の教授にも見せたんですね。そうしたら、その教授がひと言、「Good English, but not comfortable.」と言われたそうで、帰国後、彼が私に見せてくれましたが、なるほどと思いました。私は、彼の日本語の原稿に忠実に訳したから、文章が硬いわけですよね。そのときの comfortable という言葉が心に残って、comfortable English を教えなきゃいけないということ考えたんです。

それともう1つ、日野原先生のセミナーのシンポジウムでは、議事録が出ていて、そこにアメリカ人の話した原稿、プロが通訳したものが全部、速記録で出てくるんです。それを見て、プロの通訳でも逐語訳はしていないことに気づいたんです。Comfortable Japanese、日本語的日本語にしちゃってるんです。通訳は翻訳じゃないということが、初めてわかりました。言葉にこだわらずに、心を翻訳しろということ、これを徹底的に叩き込まれているんですね。

語学教育というのは、そこまでいくべきだと思うん

ですよ。心の読み取りができるようになったら、1人前だなと思います。僕は、大学にこそ言葉にこだわらずに心を翻訳する、comfortable Japanese, comfortable English が自由にできるようなプログラムを入れないと日本の英語教育はよくなるんじゃないかと思います。

伊達 私が『うまい英語で医学論文を書くコツ』を読んだときに、先生が具体的に「何パーセントになった」と書かれているのがものすごく印象的でした。例えば、「この文章を comfortable English にすると 67% になった」と具体的な数字で書いてある。「こういうふうに訳せ」という本はありますが、実際に文字数や、文章の長さを数値であらわした本というのは、ほかになかったんじゃないかと思って、非常に新鮮でした。

植村 それにはネタがあって、“JAMA”の編集長を19年務めた King LS が書いた “Why not say it clearly?” というバイブルがあるんですよ。彼は医師でもあるのですが、原稿を受け取ったときに、「3分の1にしろ」と言うのだそうです。そうすると、美辞麗句を落とすんですね。それが comfortable English です。相手がネイティブだから、それで英語がきれいになるんだそうです。

ところが、われわれはネイティブじゃないですから、カットしろといったら、大事なキーワードが落ちてしまう。それには気をつけなきゃいけません。

伊達 大井先生も、たくさん本を書かれています。本を書かれるうえでの苦労話などございますか。

大井 『国際学会英語表現辞典—Congress English』（三輪書店）というのは、私が同時通訳団に入れていただいて、植村先生に英語を習ったもの、自分が学んできたことをまとめたものなんですね。いま先生がおっしゃったような、とっさの表現力のようなものをまとめたものです。これを読んでみると何でもない英語なんです。自分の表現力として、自分が蓄えているかどうかなんです。だから、ここに「初めての学会も怖くない」と書いてあります（笑）。いかに反射的に、こういう表現が使えるかということなんです。この本は、「虎の巻」みたいなものです。

伊達 本郷先生も、『プリンシパル英文抄録の書き方』（日本医事新報社）を小林先生と一緒にお書きになっていますが、よく売れている本ですね。

本郷 ええ、ベストセラーの1つといわれているんですが、私は小林先生のお手伝いをしただけで…。メモがポイントですね、小林先生も何か読まれると、「あ、これは…」というので、常に目にとめた英語表現をメモされていました。この本は決して厚くはないですが、コンパクトにまとまっています。しかし、こういうコンパクトな本を書くにも、あれだけの情報収集、資料収集はすごく大変だなとみていて思いました。

■同時通訳のコツ

伊達 では、実際の同時通訳のコツですが、これは先ほどから何度か出てきました。「頭から訳す」「要点のみ意識する」「ポインターを追え」などがありました。最初に言われたように、昭和や平成といった年号の西暦への換算や、桁の大きな数字がいきなり出てきたときには換算表が便利だということで、私も、こういったことをずっと教えていただいていたと思います。

植村 「意識」ということでは、Peerless (University of Western Ontario) に教わったことがあります。

私は以前、演者が原稿の棒読みした時に“*He speaks too fast*”だからといってスイッチを切ったことが1度あります。日本語を完璧に英語に訳すと、1.5倍の長さになります。逆も同じです。どうしても通訳したものは長くなりますから、相手がゆっくり話さない限り、本当の意味の同時通訳ができないんです。それでスイッチを切ったのですが、Peerlessが「お前は医者だろう、*edited translation*をしる」というんです。全然ついていけないときには、「歴史的なバックグラウンドを話している」とか、「脳血管縮の話をしている」「*methodology*をレビューしている」とか言ってくれば、それで安心する。とにかく「何か音を出せ。サイレンスはやめろ」と言われましたよ。

同時通訳のコツ

- ・タイムリーに訳す (*phrase translation*)
- ・要点のみ意識する (*edited translation*)
- ・ポインターを追え (スライドが重要)
- ・As for は便利
- ・無言の時間はつからない
- ・演者の言おうとすることを先取りする
- ・換算表をブース内に持って入る

それから、Lindsay Simon から「われわれ学者は、*figure* でわかる」と言われたことがあります。スライドの意味さえわかれば、発表の中身は全部わかると言われて…「医学のプロというのは、スライドが命なんだ。スライドの翻訳に徹しろ」と。

伊達 なるほど。先生がおっしゃるとおり、私たちも医学の同時通訳をするときにはいわゆる言葉を訳すプロの同時通訳とは違った概念でやらなければいけないですね。それを、私も学んだなあと思います。スライドを一生懸命見て、とにかく内容を伝えることは大切ですね。

植村 結局、どういう同時通訳がいいのか考えるというときに、ユーザーのフィードバックが大事なんですよ。サイレンスは駄目だとか、ポインターがあわなくちゃ駄目だとか、本文なんかどうでもいい、スライドだという、そういうフィードバックをしてもらったこと、それによってわれわれの技術が伸びたんじゃないかと思えます。

■英語のスキルアップのために

伊達 それから、先生方は、英語の上達のために普段はどのような努力をされていますか。ご教授いただければ、若い皆さんの参考になるかと思うのですが。

植村 小林茂昭先生に教わったんですが、彼は同時通訳を始めて、あっという間にうまくなったんです。それで彼に聞いたら、あらゆる学会で、聞きながら心の中で同時通訳をするというんです。それで私も、テレビを見ながら中曽根やブッシュの演説を聞いて同時通訳してみるんですけど、これがなかなかうまくいきません。それで、字幕を見ると「チクショウ!」と思う。やっぱり、しょっちゅうその訓練をすることですね。

大井 内容を知っておくことも大事ですね。小林先生はまず抄録を読まれるんですが、日本語を読みながら、英語に訳して通訳の練習をされているのが、隣の部屋から聞こえてきたことがありました。大変な努力をされているんだと思っていて、私もそれを真似したことがあります。

本郷 私の話も小林先生のことですが、教授になつてからも、朝のラジオの英会話講座を聞いていると伺いました。本当に英語が好きだし、それをキープするために普段から地道な努力をされていてびっくりしまし

た。カンファレンスや学会では、常に意識しながら聞いておられた。そういうのを目の当たりに見ている、学ぶところが大きかったです。

大井 通訳団に入ったことで英語が上手になりますよね。伊達先生なんか、ものすごく急速に伸びましたよね。ニューロンの加齢に伴う減少からいってどうでしょう？ 40代なら、まだまだ伸びますよね。

植村 ええ。

大井 そうでしょう？ 40代まではまだまだ成長すると、自分でも思いました。

植村 もう1つ、私がいまもやっているのですが、読売新聞の日英の両方を買うんです。毎週日曜日に「地球を読む」というのが出て、同じものの英語版が出るんです。それが、逐語訳じゃないんです。新聞記者だから言っていることは絶対に省略していないけれども、パラグラフを自由に変えます。これは、かなりのセンスがないとできない。非常にレベルが高い話です。「こんな言い方をするのか！」「なるほど！」と。

伊達 言語によって、フレーズの場所を変えたりというのは、十分あり得る話ですね。

植村 僕は、パラグラフィングのことがわからなくて、1度、困ったことがあるんです。浜松医大にいた Kelly, JDさんという方が言ったんですけど、「日本語は、基本的に句読点がない。パラグラフがない。というのは、日本語は昔、巻紙に墨で書いたものだからページがない」と。

ヨーロッパの言語は、単語どうしが固まってフレーズになりセンテンスをつくる。センテンスが複数集まると、アイデアが出てきて、1つのパラグラフを形成する。だから、英語のパラグラフというのは大事だということですね。

それから、Kellyさんは私に、「新聞社説の各パラグラフの最初の文だけに赤線を入れて、それを全部読んだときに意味が通じたら完璧だ。パラグラフの最初の文は、テーマでなければいけない。だから、そこだけ読んで通じないのはパラグラフになっていない」というんですね。実際に私もやってみましたが、失敗がない。

伊達 なるほど、それは面白いですね。いい勉強になりました。

■同時通訳団の目指す先

伊達 最後ですが、同時通訳団は、日本の脳神経外科の非常にユニークな組織といえると思うんですけども、その意義は、だいたい次のようにまとめられると思います。1つは、これも何度もお話が出ていますが、外国人を招待した場合、その講演者を含めて、いわゆるディスカッションのセクションで非常にスムーズにいくということ。それから、外国からの留学生が非常にたくさん参加していただけるようになったこと。アジアのほかの国からも先生方が来られます。そして、やはり脳神経外科医全体に、この通訳団があることで、英語に対する興味をさらに高める原動力の1つになっているかなと思います。

ほかに何か、追加はございますか。

植村 特に、「アジアの他国からの脳神経外科医が参加しやすくなった」ということ。アメリカやヨーロッパのほとんどの学会は国際学会化していて、いろんな国の人が来ますよね。日本の脳神経外科学会総会には、毎回約20人の招待外国人講演者が来ます。主会場での講演が同時通訳されているとなれば、タイやフィリピンの人は来ますよね。そういう意味で、日本がアジアをリードするには、ほかの学会にも呼びかけて、日本の学会がアジアをリードするために同時通訳をしなくちゃ駄目だというふうに思います。

伊達 そうですね。植村先生や、大井先生のように、前にグングン引っぱってくださる人がいたからこそできたということだと思います。仲間に「やろう」といって募って、その仲間も意義を感じて…。その点では、本当に脳神経外科というのはすごいなあと思います。好きな人が集まって、研修会までやって、こういうふうになってきたわけですから。

時間もきたようでございます。今日は、長い時間、有意義なお話をいただきました。まことにありがとうございます（了）。